浄信寺通信

平成２３年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL（〇五二）五六一―一七三六

頒布価格年　千　三百円
（檀信徒会費）

ヒマラヤの秘境・桃源郷（とうげんきょう）
ブータン国を訪れて

観るだけで解脱出来るトンドル（大掛仏）の開帳　最取日早朝

東北地方に未曾有（みぞうう）の大震災が起きた数日後に、ヒマラヤ山脈の南麓に位置し、人口七〇万人、仏教を国教とする、日本の九州ほどの面積のブータン王国へ、セントレアから飛び立った。日本からの直行便はなく、タイのバンコックで一泊して、翌日の早朝にブータンに乗り入れている唯一のブータン国営航空「ドゥルック・エアー」の小さな飛行機で、世界で一番離着陸が困難といわれているパロ空港に無事到着した。

ブータン国は、国策から無制限に外国人の観光客を受け入れている訳ではない。国の認可を得たガイド同伴の旅行が義務付けられている。ガイドと移動の車それに宿泊代金を含めて一日二〇〇ドルを国に支払う制度になっている。ブータン国内を自由に一人旅とはいかな、その反面治安は良く、発展途上の国の様に、子供達が、お土産を持って外国の観光客に付きまとう姿は皆無であった。

それどころか小学校から、公式言語のゾンカ語以外の授業は、全て英語でなされており、インドと中国の大国に囲まれたヒマラヤの

平和公園墓参のご案内

日時：８月１２日（金）
１３日（土）

午前８時頃～午後１時頃

お弁当持参での国内・外国からの

小さな国が、国際社会の中で生き延びていく慧智として英語教育を最重視している姿勢は、この国の優れた指導者の英断を垣間見た気がした。

今回、ブータン国を訪れた目的は、パロでの最大の年中行事である『パロ・ツェチュ祭』の見学であった。

『ツェチュ』とは、（毎月の）「一〇日と言う意味だそうです。紀元後八百年前後に、チベット仏教をヒマラヤ地域に流布させたニンマ派の祖師グル・リンポチェ（パドマサンバヴァ）が、生涯に起こした十二の奇跡が、毎月の十日に起きたと言う伝承に基づき、毎月の十日にその月に該当する法要を営み、グル・リンポチェに再び会うことできると人々に信じられてきた行事である。

ブータン各地では毎月『ツェチュ』祭りが行われているが、その中でも『パロ・ツェチュ祭』は、ブータンに春の訪れを告げるこの国最大の祭りである。パロ谷を見下ろす小高い丘に建てられたパロ・ゾン（ゾンと言うのは寺院の意味）のデヤカン広場で、五日間にわたって開催される。祭りの間は学校は休みになり、ブータン国内は言うに及ばず、外国からのも多数の見物人が訪れるのである。

祭りの期間中、僧侶（一部は専門の舞踏家が含まれる）による、鮮やかな衣装と伎楽（ぎがく）の面を彷彿（ほうふつ）させる各種仮面をつけた【チャム】（「チャム」はチベット語で「跳」または「舞」の意味だそです）と言われる仮面舞踊や、地元の女性による民俗踊り（民謡）が披露される。

前述したグル・リンポチェが、この地に広めた仏教は、日本の仏教と同様に、紀元前五世紀頃にお釈迦さまが悟られた仏教とは、少なからず異なっている。彼は自らの霊能力と権威を駆使して、その土地の土着の悪魔達を次々倒し、習合して仏教徒に改宗させていったと言われている。チベット密教（ラマ教）に近いとされている。

こうしたグル・リンポチェの行実が、壮大なオペラや叙事詩の如く踊や劇で『ツェチュ祭り』の間に披露される。謂わば難解な仏教の教えや、グル・リンポチェの業績を【チャム（仮面舞踊）】を通じて、人々に分かりやすい形として伝播・伝承してきたのである。

殊に人気が高いのが、今回は見学出来なかったのだが、閻魔大王の法廷を題材にした仮面劇「ラクシャ・マンチャム」です。善人と悪人が死後裁きを受ける天秤にかけるシーンは、因果応報の教理を、理屈や論理を超越して、観る者に大きな感動と驚きをの与えてきた。これを観る信心深いブータンの人々は、敬虔（けいけん）な祈りをささげ、自らの人生を考える契機になっていると言われている。仏教の教えが人々の生活の中に生き続けているのである。

◆◆

ブータンでは、公式な場所や行事では、男性は日本の丹前に似た「ゴ」、女性は「キラ」と言われる民族衣装の着用が義務づけられている。年に一度のトンドルのご開帳には、色鮮やかな金糸銀糸の刺繍（ししゅう）を織り込んだ豪華絢爛（ごうかけんらん）な衣装で着飾った「キラ」を着た女性達が、五日間の『パロ・ツェチュ祭』の最終日のトンドルのご開帳を観る為に、薄暗いデヤカン広場の坂道を登って行く。「キラ」を着たブータンの女性の姿は、あたかも日本で言えば、佐久の盆踊りの如く『夜目遠目（よめとおめ）笠（かさ）の内、物の文目（あやめ）が分からん・・・』そんな世界を、思い起こさせる幻想的な光景であった。

二〇一一年三月二〇日の早朝と言っても、午前三時頃から、縦・横三〇メートルもあるトンドル（大掛仏）のご開帳で、この祭りのクライマックスを迎える。「トン」は、見る事。「ドル」は、解脱を意味して

いる。ブータンではこのトンドルを見るだけで解脱（げだつ）できると信じられている。このトンドルには、正面中央にグル・リンポチェを本尊に、多くの菩薩。諸仏。不動などが、総絹で色鮮やかにアップリケで描かれている

やがて、トンドル（大掛仏）が掛けられる建物の前に、赤い法衣を着た僧侶によってトンドルが運び込まれ、祭檀が設えられ、バターランプの独特な臭いと、ろうそくの炎が揺らめく。満月の月明かりもとで、ひときわ大きいドラの音を合図に、建物の屋上から下げられた綱によってゆっくりと、巻き上げられると、トンドルが徐々に姿を現すのである。今では多少ライト・アップがなされいるが、昔は、電気も無く、月明かりやバターランプの光、かがり火の明かりに浮きあがったこのトンドル拝んだ、ブータンの人々は、正にグル・リンポチェの再来を信じて疑わない感動を味わったに違いない。

人々は、こぞってこのトンドルの前に進み出て、裾を額に押し当てて無病息災を祈念するのである。やがて太陽の東の空に昇る頃に、僧侶による法要が勤修されるのである。

この法要中は、一旦ホテルに帰り朝食を食べていた時の行事で実際には観ていないのだが、地元のTVで実況中継がなされていた。驚いた事に、この法要の中で、今回の東北地方を襲った大震災の犠牲者に対しての追善法要を勤修する旨の報道がなされていた。はるかヒマラヤの小さな国のブータンの人々が、見も知らない日本の犠牲者に対してその魂（たましい）安らかなれと、祈りをささげて下さる姿には、心打たれた。翻（ひるがえ）って考えれば、少なくともあのアメリカの貿易センタービルの惨事の折に、我が宗門に限らず、日本仏教界が犠牲者に対して追善法要をした等とは聞いた記憶がない。ブータンの人々のこれほどの親日感には、ブータンで二十八年間献身的な農業技術指導を行った一人の日本人の故西岡京治（にしおかけいじ）氏の活動を抜きにしては、語れない。

ホルンのような音色の管楽器
チベット・ホルンの一種かな

◆
◆

西岡京治（にしおかけいじ）氏は、一九三三年京城（ソウル）で解剖学者西岡辰蔵の長男として生まれた。戦後大阪府八尾市に居を構え、大阪府立大学の農学部に入学。当時助教授だった中尾佐助氏の勧めで、海外技術協力事業団（現・国際協力事業団）の農業指導者として、東京オリンピックの年一九六四年四月に、奥さんと二人で鎖国状態のブータン国に赴任した。小さな実験農場で、日本から持参した大根の試験栽培を試み、懇切丁寧に栽培方法を現地の人々に指導した。それまでブータンでは見たことのない大きな大根が育ち、次第にブータンの農民の信頼を得る事になり、西岡氏も農業指導に心血を注いだ。

中でも稲作の栽培では、ブータンでは、それまでは、勝手気ままに無秩序に苗を植えていたので、苗と苗の間の風通しが悪く生育に悪影響を与える。更に手押しの除草機が使えない非合理的な栽培方法を、長年親しんできた従来の栽培方法に固持する農民に対して、日本では縄文以来、当たり前の並木植に変更する様に指導した。（並木植：縦と横を一定間隔で苗を植え

民族衣装ゴを着た故西岡京治氏
―ブータンの朝日に夢をのせて―

る方法の事）結果は、並木植えに変えただけで、それまでの収穫量は四〇％も増大したのである。氏は又人材の育成、新品種の導入による生産量の増大、野菜、果物栽培の普及と食生活の改善等精力的に従事した。

一九七六年からは、国王直々の立案によるシェムガン県の開発プロジェクトに責任者として携わることになる。シェムガンは、ブータンの中でも極貧地域で人々は昔から中央から忘れられた土地と言われていた。人々は昔からの焼畑農法に頼っていた。収穫量が下がると新しい土地に移住して、また森を焼き、畑を作る。それを繰り返す生活を営んでいた。ここでも、西岡氏は「身の丈に合った開発」を提唱して、コンクリート製の橋を作るのではなく、現地の人々の技術で新しく十七本のワイヤーロープ製のつり橋を掛け。塩化ビニール製のパイプや竹を利用した水路の数は三六〇。現地の人々の手作業での道路の総延長は三〇〇キロにも及んだ。シェムガン県に一・二ヘクタールしかなかった水田は、五〇倍の六〇ヘクタールに増大し穀倉地帯に変貌を遂げたのである。

祭りの脇役・進行役としての道化師の『アツァラ』

一九八〇年西岡は長年のブータン農業への貢献を評価されて、国王から「ダショー」の称号を受けた。（ダショーとは英語のベストを意味し、英国のサーにあたる称号「最高に優れた人」という意味）ブータンでは、県知事や最高裁判所の判事に与えられる称号。この時すでに十六年の歳月が過ぎていた。それから更に十二年間西岡氏のブータンでの生活が続くのである。一九九二年三月二十一日敗血症が元でブータンにて急死するのである。

葬儀は一九九二年三月二十六日外国人では極めて異例の形で、農業大臣が葬儀委員長を務め国葬で営まれた。僧侶の読経が絶えまなく続き、ブータンの山々にこだました。パロの小高い丘に作られた斎場にはブータン全土から五千人以上の人々が集まり、ブータンは国をあげて、西岡氏の業績に感謝の心を捧げたのである。

パロの農場の一隅には西岡氏を記念する【チョルテン】（仏塔）が建てられ、ブータンの人々の記憶の中に今でも生きているのである。記憶だけではなくて、余り知られていないのだが、西岡氏とブータン人の現地妻との間に生まれた遺児が、農業指導者としてブータン農業の発展の為に貢献されている。苦楽を共にした日本人の奥さんは、西ノ宮でブータン関連のお店をなされている。

報　恩　講　勤　修

平成２３年１１月９日（水）

午前１０：００～

勤行・説教・おとき

仏教と話芸・・講談の世界・・

ゲスト：講談師　　旭堂南舟

地元の若い女性による民俗踊り（民謡）の披露